

# 山と博物館

第47巻 第9号 2002年9月25日 市立大町山岳博物館

特集 企画展 對山館と百瀬慎太郎展 (10/5~12/15)  
—岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る—



昭和16年7月15日の對山館（百瀬堯氏所蔵）

## 「對山館と百瀬慎太郎展」の開催

「今日の国鉄大糸線のいまだなかつた明治、大正初期の後立山方面への登山者は、松本か、明科から乗合馬車で大町に入り、対山館を根拠にした。もつとも白馬岳だけは四つ谷に古くから白馬館があつて、白馬尻の岩小屋に一泊して登るのであつたが、その他の日数を要する縦走の準備はみな対山館で調えるのであつた。登山者の計画に従つて案内人の選択から食糧、草鞋、カンジキ、杖に至る一切の準備を手際よく整え登山隊を送り出すのも彼であつた。また山から帰つて疲れた腰を対山館の広いあがりがまちに下ろすと、濯ぎの水を入れた盥を持つて来てくれたのも彼であつた。後年私はスイスのグリンデルヴァルト村のアドラーという宿に逗留したことがあるが、その宿のバス氏も同じよう温かい人であつた。彼はスイス一流のホテルマネージャーであつたが、このとき私は慎太郎さんも世界的水準のマネージャーだと想つたのであつた。アルプス登山史上、大きな寄与をなしているツエルマットのホテル・モンテ・ローザのあることは周知のところであるが、対山館は日本アルプス登山史上、これにも比すべき業績を持つものと思つ。たゞホテル・モンテ・ローザは現在も登山者の根拠となつてゐるが、交通の発達により大町が多くの登山者にとつて通過地と変化したことはやむを得ないことである。大町が登山者によつて最も賑わつたのは、明治末期から大正初期であつたと思うが、その頃すでに対山館は大沢に小屋を建て、昭和に入つて更に針ノ木に小屋を建て登山者に便宜を与えてゐる。また大町に登山案内人組合を大正年代に組織したのも彼であり、同種組合の草分けであるが、彼の指導の下に優秀な案内人が育成され大町案内人の名を高めたのもそのころであつた。」

横 有恒

『百瀬慎太郎遺稿集 山を想へば』（一九六二）

（序にかえて）より抜粋

慎太郎生誕一一〇周年・大町市山岳文化都市宣言元年のこの年に、百瀬家はじめ多くの皆様のご協力により開催いたします。多くの未公開資料から岳・大町・対山館・慎太郎が結びついて花開いた登山文化の原点に思いをはせていただける企画いたしました。半世紀以上の時を越え、本企画展が現代に通じる示唆深い場となりますなら幸いです。

ご高覧のほどお願い申し上げます。

（大町山岳博物館）

# 対山館の時代とは何だったのか（前）

峯 村 隆

## はじめに

「終生、大町を出なかつた慎太郎さんは、明治、大正、昭和の転変の激しい時勢を、山紫水明の故郷に住んで、静かに眺め、考え、じつと自らを守りつけた心底から男らしい生涯を送つた人であった。彼は幼少の折の火傷のために隻眼であった。晩年の彼は瘦ぎすの体と輪郭の明確な美しい顔貌に寂しさを含んで、宛ら運命に耐え、孤独に徹した人物のように思われた。彼の家業は対山館の名で知られる旅宿業であった。この家業は先代から引き継いだものであつたが、本人の好むところではなかつたようである。この自分の職業にむしろ批判的であつた彼は、打算に疎くその深い教養によつてかえつて広く多くの友人と交誼を得たと思う。明治から大正へかけての登山の中心地としての大町のその中心は対山館であり、またその対山館をして人口に膾炙せしめたものは彼であつた。」

横 有恒

（一九六二）「序にかえて」より抜粋  
『百瀬慎太郎遺稿集 山を想へば』

また横は、周到綿密で親切な扱い・わが国初の登山案内所組合の創設と優れた案内者の養成・登山案内所の開設など百瀬慎太郎の業績を高く評価して「近代的登山の潮の波頭に立つて、登山者に与えられた恩恵は単に職業上そうであったというには余りに大きい陰の力であった。であるから私はこの時代の一画を対山館時代と称えても過言ではないと思うのである。」とも述べている。（\*1）



百瀬金吾（百瀬堯氏所蔵）

ここでは「対山館の時代」をキーワードとし、その時代を創設の明治二十年代から廃業の昭和十八年までのおよそ五十年間と設定し、企画展のいくつかのテーマに沿つてその意味を探つてみたい。なお企画展のタイトル同様、引用文をのぞき創設当初の旧字名称を尊重して「対山館」と表記する。

## 対山館誕生前史

いにしえの針ノ木峠

針ノ木峠はドラマチックな歴史と伝説に彩られている。

昔も今も北アルプスが信州と越中・長野と富山を隔てる要衝であることに変わりはない。それでも大昔の人々は山々谷々に分け入り、最も合理的な歩行ルートを探し求め、針ノ木峠を見つけたはずだ。一説に、それは立山信仰の最初の流行期、鎌倉末期から室町時代のことである。すでにそのころから裏参道として、また交易ルートとして踏まれるようになったともいわれる。その後天正十二（一五八四）年真冬の富山城主・佐々成政のさらさら越え、

百瀬家は屋号を今（やまちよう）といい、少なくとも江戸時代以来の旧家であり、いつのころから問屋取次業を営んでいたと伝えられている。これは文献に見出せない言葉であるが、字句からすれば物資や情報の流通を円滑にするための仲介が主な仕事だったと想像できる。当主は代々新右衛門を名乗つてゐた。江戸後期（一八〇〇年代前半）には下中

間口八間奥行十二間・切妻白壁総三階建。広い屋根裏（四階）まで吹き抜き、城の天守閣のようだ。大胆に階段と回廊を配した特異な和風設計だった。当時の大町の町場の家は背の低い切妻の平屋が普通だったから、これは頭抜けて目立つ建物だった。着工は二十三年春として完工には長い年月を要したものと思われる。

## 対山館の誕生

間口八間奥行十二間・切妻白壁総三階建。

ウエストンは明治二十六（一八九三）年八月、針ノ木峠越えのために新町ですすめられ初めで今に宿を乞うた。亭主は「不承不承頼みを入れてくれた。彼は何もおもてなしするものとございません」と言つた。（中略）私を階上に導いてくれたが、そこには鉄鎗や鋸を使う音がして、大工たちが働いてい

江戸時代の加賀藩の御縮り山（入山禁止）政策を反映する黒部奥山廻り役の国境巡視、さらに明治初期の野口村・飯島善造らによる信越連帯新道（針ノ木新道）の開通と挫折など、興味がつきない。

千国街道 大町宿



斎藤謙一郎（百瀬堯氏所蔵）



7歳ころの慎太郎（百瀬堯氏所蔵）

い。 い。 い。

「のだった」。またそこには「大名にもふさわしい」できたての「二十七畳敷の室があり、貴には一点のシミもなかつたこと、多くの泊まり合わせの客がいたことも記している。工事と並行して営業していた当時の様子が目に浮かぶ。(※4)

問屋取次の商いは、物とともに人の出入りも頻繁で、あるいは宿泊の便もはかつっていたのではないか。だから旅館への転業は先を見越した無理のない英断だったのではないかとの見方もできる。(※5)

いずれにせよ明治二十年代中ごろには今旅館は誕生し、金吾の才覚と人当たりのよさによつて人気を増していく。

なお「對山館」は誰の命名で実際いつから併用されていたのか、その来歴は判然としな

るのだった。またそこには「大名にもふさわしい」できたての「二十七畳敷の室があり、畳には一点のシミもなかつたこと、多くの泊まり合わせの客がいたことも記している。工事と並行して営業していた当時の様子が目に浮かぶ。(※4)

對山館と慎太郎

慎太郎 生いたちとあこがれ

ともに現存している。(\*6) 雲坪の表額に今のところ探るばかりである。

して自己陶酔に浸つてゐた。「國を去つて三  
巴遠し、樓に登る万里の春。」その文句を今  
も口ずさみ勝ちになる時に母のおもかげを憶  
ひ浮べるのである。尋常科の二、三年頃であ  
らう。漢詩の判る訳もない。ただ子守唄の様  
に聞いただけである。母は祖母からもらつた  
三味線を爪びきで弾きながら、よく春雨など  
を唄つて、自分を慰めてゐた。人に聞かれぬ  
奥の座敷で、独りさうしたセンチメントに逃  
避していた其の頃の母の心情を想ふ。」(\*8)

こうした万世や金吾の素養と日常は、無意  
識かもしれないが幼い慎太郎の文芸の素地を  
養つたと思われる。

明治三十二（一八九九）年四月に大町尋常  
小学校へ入学<sup>（こうのいんがく）</sup>。時の校長で高山植物の研究で  
知られる河野齡藏<sup>（こうのりょうざう）</sup>との逸話もそれを物語つて  
いる。

（内野新見先氏所蔵）  
誌『少年』（時事新報社刊）を教師から見せられ刺激を受け、若き思想家ともいえる同級の内山重助とも親しくなり、後にロシアなど海外の文学や思想にもなじんでいく。いわば鄙にはまれな先進の文学少年・青年となつてだが右目を失明させてしまつた負い目から、慎太郎に強く今新右衛門的な生き方を強要することはできなかつたろうし、高価な本の入手など、慎太郎のわがままもかなり容認していたと思われる。

明治三十九（一九〇六）年八月、大町中学二年生、十三歳にして年上の友人三人と初の北アルプス、白馬岳に登り、「高山の雄大な景観に魂をうばわれ」「病みつき」となり、「それから毎年、ある年には三回も此の白馬だけが山であるかのやうに登らずにはゐられなくなつた」。翌年には画家丸山晩霞とも白馬行をともにしている。この最初の登山で、世話になつた白馬鉱山事務所の佐藤工学士が前年十月にできた日本山岳会の創設発起人のひとり城数馬の友人だつた関係で、事務所に贈られてあつた日本山岳会の機関誌『山岳』第一年第二号を佐藤からもらい、以降購読し続け、また翌年からは、やはり日本山岳会の生みの親のひとり、小島烏水の『日本山水論』『山水無尽藏』等々を取り寄せて読みふけるようになる。（\*9）『山岳』にせよ烏水の著作にせよ、中学生には相当高級で難解な本だつたはずだ。

慎太郎は日本山岳会の誕生、つまりは日本近代登山の黎明期に、急ぐように山に魅せられ、心酔しはじめたのである。明治四十二



辻村伊助（百瀬堯氏所蔵）

年八月、十七歳に満たない若さで日本山岳会に入会・会員番号二二五番。さて中学時代に山と山岳文学に親しんだ慎太郎は、卒業後の進路について父や母と理解を深めることなく、二高（後の東北大学）受験のため仙台に赴く。しか途中で使いの者に連れ戻されている。（\*10）なぜ大町を出て二高でなければならなかつたのか、その真意は不明だが、おそらく文学・山・家業の間で悩み、文学の道に走ろうとしたのではなかろうか。

明治四十三（一九一〇）年三月、大町中学校卒業。忸怩たる思いを胸に、對山館にとどまる。

慎太郎 人の山脈（二）

大町に戻された慎太郎の生きがいは、もちろん山であつたろう。

「山岳夜話」のなかで慎太郎は「私の山への思慕を導いてくれた最初の恩人である様に思はれる」と辻村伊助を語る。

辻村は明治四十二年、まだ東大農芸化学科の学生だったころに初めて對山館に泊まり針ノ木越えの立山登山をしている。後に名著『スイス日記』（一九三〇）を残す慎太郎より六歳ほど年上の青年であった。慎太郎の記憶によると辻村の對山館宿泊はほかに明治四十年代の青年であった。慎太郎の記憶がなかつたなら、私は生きるかひもない索然と云つても良い。そしてそれ等の人々は真に好みばかりであった。いつとはなしに山によつて結ばれてゆく友情を有難くこよないものと思つて決めるのであつた。今も尚此の友情にあつたのかもしれない。

明治四十三年新雪の十月、黒部の主たる遠山品右衛門とその子作十郎に伴わされて初めて



慎太郎（左）と短歌を愛好する中学の同級生たち（百瀬堯氏所蔵）

針ノ木峠を越え黒部川を往復する。

「白沢から上は道らしい路もない沢賀街道の名残の痕跡が雪渓の左岸に残つてゐた。峠の上に立つた気持は寂寥そのものであつた。その寂しさが他

では味はれない魅力のようと思はれた。」（\*12）

針ノ木との出会いもまた、このときだつたのである。

（つづく）

四年と大正元年の三回だけだというが、人生の最大の岐路で辻村に出会い、その氣質や教

養、そして何より山への純粹な姿勢に接し、大いに力づけられ、心のなかで山と人と對山館と自己との整合が保たれていくようになつたようだ。文学青年の間ではやりだした短歌を中学の同級生とともに作り始めたのもこのころで、明治四十四年には若山牧水の門下生になつてゐる。（\*13）

（\*1）「信濃支那報」第三号（一九四九）  
（\*2）相澤亮平 企画展解説（二〇〇二）より  
（\*3）相澤亮平 企画展解説（二〇〇二）より  
井垣美和氏（慎太郎次女）談（二〇〇二）  
（\*4）ウエストン「日本アルプス」岡村精一訳（平  
凡社刊）

北沢勝二「仁科路」第三十二号（一九八二）

参考

・近代登山の黎明・南画家長井雲坪と對山館の誕生

○

・近代登山の黎明